

東洋文庫
452

平凡社

八代集
1

奥村恒哉校注

おくむらつねや
奥村恒哉

1927年、京都府生。京都大学文学部卒業。

専攻 平安時代文学。

現職 鹿児島県立短期大学教授。

主著 『古今集・後撰集の諸問題』(風間書房), 『歌
枕』(平凡社選書), 『校注古今和歌集』(新潮社),
『古今集の研究』(臨川書店)。

八代集1〔全4巻〕

東洋文庫 452

1986年1月24日 初版第1刷発行

校注者 奥村恒哉

発行者 下中邦彦

印刷 株式会社 共立社印刷所
製本 株式会社 石津製本所

電話代表 03-265-0451 〒102 東京都千代田区三番町5
発行所 営業 03-265-0455
振替 東京8-29639 株式会社 平凡社

© 株式会社 平凡社 1986 不良本は、直接読者サービス係で
Printed in Japan お取替え致します(送料小社負担)
定価は外箱に表示してあります

ISBN4-582-80452-7

まえがき

はじめに本書の意図について記しておくのは必要なことであろう。

底本には木版本を使用した。木版本は原本から発して長い期間にわたって本文が流布変容したのち至りついた、いわば終着点である。終着点を把握しておかないと、本文変化の方向がわからなくなる。また木版本の本文は、中世の末以来近世を通じ、さらに明治・大正・昭和の初期まで流布本として通用したので、この間の『八代集』の研究は全く流布本によっていた。それらの研究の反省のためには木版本のテキストが必要である。ところが最近では古い時代の良好な古写本の刊行が多く、かえって木版本の形をうかがうことが困難な状況になっている。木版本そのものも入手難で、ほとんど稀覯本の如き有様である。この欠を補いたいと思ったのが、木版本を底本に撰んだ理由である。

それに、木版本が無闇に崩れた本文ではないことも筆者の念頭にあった。また、例えば『古今集』の流布本を藤原定家の貞応本だ、とあっさり片付けがちであるが、木版本は貞応本の原型そのままではない。たしかにその流れであるが、若干の差異がある。その差異のままで、中世末から大正・昭和初期まで流布本として使用され、研究に用いられたのである。その点を重視するのである。何種類かの木版本相互間に微異があるのも事実である。「イ本」「他本」との傍注はその事実の存在を示す。しかし、木版本を総合して原型を求めることはそれほど意味があるとは思われない。結果は貞応本になるからである。

筆者の興味は注釈の上にあった。例えば筆者の経験によると、『拾遺集』と違って引用すると、それが既に『古今集』に載っていたり、さらに『万葉集』にも出ていたりして、後に気がついてあわてるような場面にしばしば遭遇した。こんな場合、うかと見落す可能性が高い。(もちろん一つ一つの丁寧な吟味が必要なことは言うまでもないが、これはかなり煩瑣な作業である。) 本書はこのような欠を補うことも目的の一つである。今までの注釈書ではこの方面の注記は極めて粗であった。

凡 例

一、本書は、国立国会図書館蔵（榊原芳野旧蔵本）『八代集』（全十六冊、正保四年刊）を底本とし、宮内庁書陵部蔵『八代集』（全八冊、室町中期写）、及び北村季吟『八代集抄』（抄本）をも参照した。底本は印刷が鮮明で、無闇な宛て字も少ない穩健な本作りであると思った。

二、全体を四分冊とし、1Ⅵ古今和歌集・後撰和歌集、2Ⅵ拾遺和歌集・後拾遺和歌集、3Ⅵ金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集、4Ⅵ新古今和歌集、を収めた。

三、各勅撰集ごとに国歌大観番号を付した。

四、注には、宮内庁本との異同及び各和歌の他書への重載を示した。注は見開き頁の左端（巻末の場合を除く）に、「Ⅰ」内に歌番号を示して別記した。

五、注に採用した他書の略称とその底本を左に表示する。

注の略称の下に数字は、漢数字Ⅵ章・段、漢字のヒラ数字Ⅵ歌番号、洋数字Ⅵ底本の頁数を示す。

書 名	略 称	撰 著 者	成 立	数 字	底 本
万葉集	万		未詳	卷Ⅰ歌番号	国歌大観

[illegible]

集話説	語物史歴	語物歌	謡 歌	
今昔物語集 宇治拾遺物語 古今著聞集	栄花物語 大鏡 今鏡 増鏡	伊勢物語 大和物語	催馬楽 神楽歌 和漢朗詠集 梁塵秘抄	新後拾遺和歌集 新統古今和歌集
今昔 宇治拾遺 著聞	栄花 大鏡 今鏡 増鏡	伊勢 大和	催 神 朗 塵	新後拾遺 新統古今
橘成季	不詳 不詳		藤原公任 後白河天皇	二条為重 飛鳥井雅世
一一世紀末 一三世紀前半 一二五四	一〇九二以降 一一七〇 一三三三—七六	平安前期 九五—	八九七—九三〇頃 一〇一三? 一二世紀末	一三八四 一四三九
巻一話	巻名 巻名 巻名 巻名	章・段 章・段	歌番号 歌番号 歌番号	歌番号 歌番号 歌番号
国史大系 新潮日本古典集成 岩波古典文学大系 84	岩波古典文学大系 75 76 岩波古典 朝日日本古典全書 岩波古典文学大系 87	岩波古典文学大系 9 岩波古典 9	小学館 日本古典文学全集 25 小学館 日本古典文学全集 25 岩波古典文学大系 73 小学館 日本古典文学全集 25	国歌大観 国歌大観

[illegible]

論					歌				
後撰集正義	僻案抄	顯注密勘	詞花集註	後拾遺集注	拾遺集注	古今集注	八雲御抄	袖中抄	綺語抄 和歌童蒙抄
正義	僻	密	注	注	注	顯注	八	袖	童 綺
藤原為家?	藤原定家	顯昭・定家	顯昭	顯昭	顯昭	顯昭	順徳院	顯昭	藤原仲実 藤原範兼
一一〇七	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八	一一八
一三〇四頃?	一二二六	一二二一	一一八三	一一八三	一一八四?	一一九一	一二三五—四二	一一八六—八七?	一一八—二七?
頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁
別五	別五	歌学大系別五	別四	別四	別四	歌学大系別四	歌学大系別三	歌学大系別二	別一 別一(一—九)

目次

まえがき	1
凡例	iii
古今和歌集	
(かな序)	五
卷第一 春歌 上	一五
卷第二 春歌 下	二六
卷第三 夏歌	三六
卷第四 秋歌 上	四一
卷第五 秋歌 下	五二
卷第六 冬歌	六三
卷第七 賀歌	六六
卷第八 離別歌	七〇

卷第九	羈旅歌		七
卷第十	物名		八
卷第十一	恋歌		九
卷第十二	恋歌		九
卷第十三	恋歌		一〇
卷第十四	恋歌		一一
卷第十五	恋歌		一二
卷第十六	哀傷歌		一三
卷第十七	雜歌		一四
卷第十八	雜歌		一五
卷第十九	雜體		一六
卷第二十	大歌所御歌		一七
古今倭歌集序			一七
	旋頭歌		一八
	俳諧歌		一九
	神あそびの歌		二〇
	東歌		二一
	墨滅歌		二二

後撰和歌集

卷第一	春歌		一三
-----	----	-------	----

卷第二	春歌	中	二〇一
卷第三	春歌	下	二〇七
卷第四	夏歌		二一八
卷第五	秋歌	上	二二六
卷第六	秋歌	中	二三六
卷第七	秋歌	下	二四七
卷第八	冬歌		二五九
卷第九	恋歌	一	二六六
卷第十	恋歌	二	二七九
卷第十一	恋歌	三	二九五
卷第十二	恋歌	四	三二一
卷第十三	恋歌	五	三三七
卷第十四	恋歌	六	三四四
卷第十五	雜歌	一	三五七
卷第十六	雜歌	二	三六八
卷第十七	雜歌	三	三八一

卷第十八	雜歌	四	三九一
卷第十九	離別歌	羈旅歌	四〇〇
卷第二十	慶賀歌	哀傷歌	四二二
解 說		奧村恒哉	四三三

拾遺和歌集・後拾遺和歌集（本書2）
 金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集（本書3）
 新古今和歌集（本書4）

八^{はち}

代^{だい}

集^{しゅう}

1

奥^{おく}

村^{むら}

恒^{つね}

哉^や

校
注

古^こ

今^{きん}

和^わ

歌^か

集^{しゅう}